厚生労働科学研究費補助金　新興・再興感染症研究事業

性感染症に関する特定感染症予防指針の推進に関する研究

（H19－新興－一般－002）

平成19年度　総括研究報告書

主任研究者　小野寺昭一

平成20（2008）年3月

平成19年度厚生労働省科学研究補助金（新興・再興感染症　研究事業）

「性感染症に関する特定感染症予防指針の推進に関する研究」研究班班員名簿

主任研究者	小野寺昭一	東京慈恵会医科大学感染制御部教授
分担研究者	川名　尚	帝京大学医学部産婦人科教授
	本田まりこ	東京慈恵会医科大学青戸病院皮膚科教授
	松本哲朗	産業医科大学泌尿器科教授
	塚本泰司	札幌医科大学泌尿器科教授
	飯沼雅朗	日本医師会常任理事
	岡部信彦	国立感染症研究所感染症情報センター長
	大日康史	国立感染症研究所感染症情報センター主任研究官
	松田静治	（財）性の健康医学財団理事長
研究協力者	多田有希	国立感染症研究所感染症情報センター・室長
	菅原民枝	国立感染症研究所感染症情報センター
	伊藤晴夫	千葉大学名誉教授
	五十嵐辰男	千葉大学フロンティアメディカル工学開発センター教授
	佐藤武幸	千葉大学医学部附属病院感染症管理治療部部長
	井上正樹	金沢大学大学院医学系研究科がん医科学教授
	山田里香	石川県立中央病院産婦人科
	荒川創一	神戸大学医学部附属病院感染制御部部長
	三鴨廣繁	岐阜大学生命科学総合研究支援センター助教授
	出口　隆	岐阜大学医学部泌尿器科教授
	安田　満	岐阜大学医学部泌尿器科講師
	白井千香	神戸市兵庫区保健福祉部
	野々山未希子	筑波大学看護科学系
	中瀬克己	岡山市保健所長
	渡部享宏	Campus AIDS Interface
	小島弘敬	東京都南新宿検査・相談室
	堀口貞夫	主婦会館クリニック
	村谷哲郎	産業医科大学泌尿器科
	赤坂聡一郎	産業医科大学泌尿器科
	山田陽司	産業医科大学泌尿器科
	高橋康一	新水巻病院
	伊東健治	泌尿器科いとうクリニック

川井修一	かわい泌尿器科クリニック
安藤由起子	安藤ゆきこレディースクリニック
倉島雅子	さとうレディースクリニック
佐藤祐司	さとう耳鼻咽喉科
遠藤勝久	JR 東京総合病院泌尿器科部長
清田　浩	東京慈恵会医科大学泌尿器科助教授
高橋　聡	札幌医科大学泌尿器科
子六幹夫	三樹会病院
丹田　均	三樹会病院
西村昌宏	元町泌尿器科
西澤美香	帝京大学医学部附属溝口病院産婦人科
西井　修	帝京大学医学部附属溝口病院産婦人科
田中道子	国立感染症研究所病理部
佐多徹太郎	国立感染症研究所病理部部長
金子久俊	福島県立医科大学医学部微生物学講座
錫谷達夫	福島県立医科大学医学部微生物学講座教授
佐々木　一	東京慈恵会医科大学皮膚科
萩原正則	東京慈恵会医科大学皮膚科
堀田健人	東京慈恵会医科大学皮膚科
佐久間伸英	日本医師会事務局地域医療三課
澤畑一樹	三菱化学メディエンス

目次

Ⅰ．総括研究報告書：性感染症に関する特定感染症予防指針の推進に関する研究
小野寺昭一・・・・・・・・・・・・3

Ⅱ．分担研究報告書

1．性感染症の発生動向に関する疫学研究

1）感染症発生動向調査から見たわが国の STD の動向
岡部信彦・他・・・・・・・・・・29

2）性感染症の患者数全数調査の試み
大日康史・他・・・・・・・・・・44

2．若年者の性感染症を早期に発見し、治療に結びつけるための試行的研究

1）若年者を対象とした性器クラミジア感染症の自己検査の推進と早期発見・治療のための体制つくり
白井千香・他・・・・・・・・・・67

2）性の健康相談を通じての性感染症の蔓延防止に関する研究
松田静治・他・・・・・・・・・・94

3．性感染症における検査や治療法に関する研究開発

1）性器ヘルペスの病原診断法の開発
川名　尚・他・・・・・・・・・・109

2）イムノクロマトグラフィー法による単純疱疹ウイルスおよびヒト乳頭腫ウイルスの迅速検査法の開発
本田まりこ・他・・・・・・・・・113

3）淋菌性咽頭感染の実態と治療に関する研究
松本哲朗・他・・・・・・・・・・116

4）健康男性における無症候感染者のスクリーニング
塚本泰司・他・・・・・・・・・・134

5）男子淋菌性尿道炎由来淋菌に対する各種抗菌薬の感受性（1999 年～2007 年分離株の比較）の検討およびマクロライド＋βラクタム薬の併用効果の検討
遠藤勝久・他・・・・・・・・・・139

Ⅲ．研究成果の刊行に関する一覧表・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・153

Ⅳ．研究成果の刊行物・別刷・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・157

Ⅰ．総括研究報告書

厚生労働省科学研究費補助金（新興・再興感染症研究事業）
平成19年度総括研究報告書

性感染症に関する特定感染症予防指針の推進に関する研究
（H-18－新興-一般-002）

主任研究者：小野寺昭一（東京慈恵会医科大学感染制御部教授）

研究要旨

平成18年に改正された「性感染症に関する特定感染症予防指針」の推進に関する研究として以下の項目について検討を行った。

1）性感染症発生動向調査の妥当性について検証するために、指定届出機関の現状について精査すると共に、地域を限定した性感染症の全数調査を行って性感染症発生動向の分析を行った。

2）若年者の性感染症を早期に発見し、治療に結びつけるための研究として、若者向けのイベントや学園祭などの行事を活用し、検体の自己採取と郵送による性器クラミジア検査を行った。結果はインターネットや携帯メールでホーメページにアクセスして確認できるようにし、同時にホームページ上で性感染症に関する正しい情報が得られるようにした。

3）性感染症に関する新しい診断法の開発として、性器ヘルペス、尖圭コンジローマの迅速診断法について検討した。さらに、無症候の咽頭の淋菌感染に対する新たな診断法として、うがい液を検体とし、SDA法による診断の精度について検討した。治療法としては、ceftriaxone（CTRX）1g単回投与の有用性について検討した。

以下、本年度の研究成果の要点についてまとめる。

1、性感染症の発生動向に関する疫学調査

1）定点把握の4疾患は、2002年以降の過去7年間でみると、男性では、性器クラミジア感染症と淋菌感染症は2003年以降減少傾向が認められ、性器ヘルペスと尖圭コンジローマはほぼ横ばいで推移した。女性では性器クラミジアは2003年以降、淋菌感染症は2004年以降に減少傾向が認められ、性器ヘルペスと尖圭コンジローマはほぼ横ばいで推移した。

梅毒は、2000年以降2003年までは減少を示したが、2004年からは再び増加傾向が認められ、2007年も増加した。特に、2006年、2007年はそれぞれ前年に比べ、約100例の増加がみられた。

2）性感染症発生動向調査の妥当性について検証するために、指定届出医療機関の現状について精査するとともに、地域を限定した性感染症の全数調査を行った。昨年度は千葉、石川、岐阜、兵庫のパイロット4県、今年度は岩手、茨城、徳島の3県を増やし、計7県において11月1日から30日の1か月間に全数調査を行った。対象疾患は梅毒、性器クラミジア感染症、性器ヘルペスウイルス感染症初発あるいは初感染、尖圭コンジローマ、淋

菌感染症の5疾患である。

昨年度は4モデル県での中間集計の結果、総じて60%前後の回収率であった。この結果、人口が多く、定点医療機関が多い地域では、定点での年齢分布は比較的良好であった。また、疾患毎に今回調査と定点調査を比較すると、淋菌感染症では定点での年齢分布は比較的良好であるが、性器クラミジア、ヘルペス、コンジローマでは10代後半の患者数において乖離がみられた。さらに、定点の占める患者数の割合には地域間でばらつきがあることが明らかになった。

今年度は、時間的制約から兵庫県、石川県、岐阜県の回収を考慮できなかったが、とくに、同一県内での発生動向の比較や、定点設計の検討を行う必要があると思われた。

2、若年者の性感染症を早期に発見し、治療に結びつけるための試行的研究

昨年度に引き続き、若者向けイベントを活用し、郵送による性器クラミジア自己検査を行った。検査キット配布総数1850件のうち、検体回収529件（29%)、アンケート回収394件(21%)であった。無症候の若年者における検査陽性者は男性6.5%、女性4.2%であった。受診行動については、医療従事者には性についての相談を希望し、検査や治療の方法や治療費、具体的な予防方法を知りたがっていた。検査コーディネーター活動は自らの知識や関心を向上させ、若年者同士が性感染症予防について話し合う機会になったが、この検査コーディネーター活動を普及させるため、養成マニュアルとして「虎の巻」を作成した。若年者を医療につなげるためには、検査から受診まで医療機関との円滑な連携を図る必要があると思われた。

3、性器ヘルペス、尖圭コンジローマにおける迅速かつ精度の高い検査法の開発

性器ヘルペスの診断法では、感度、特異性に優れ、しかも短時間に結果を出すことのできる核酸増幅法であるLAMP法について臨床検体を用いて培養法と比較して評価した。女性性器ヘルペス患者から得た352検体では感度88.2%(105/119)、特異度99.1%（231/233）と良好な結果を得た。HSVの型の決定はモノクローナル抗体による型と100%一致した。偽陰性になった臨床検体についてみるとウイルス量が少ないことが考えられた。

尖圭コンジローマでは迅速診断法としてイムノクロマトグラフィー法をとりあげ、HPVに対する各社のモノクローナル抗体（HPV-6,11,16,18など）やポリクローナル抗体を用いて検索を行った。各種の組み合わせで検討を行ったが、すべて陰性であった。これは組織中のHPV量が少ないためと思われた。

4、薬剤耐性淋菌のサーベイランスと咽頭の淋菌感染に対する診断法・治療法の開発

2006年分離株におけるキノロン耐性淋菌の頻度は74%で、昨年に比べ改善していた。CTRX, cefodizime (CDZM) ,spectinomycin(SPCM)の感受性率は100%であったが、CTRX低感受性株では、40%～55%の株がPBP-2の変異を有していた。うがい液を用いた無症候の咽頭の淋菌感染の診断では、41例の淋菌性尿道炎患者から13例（31.7%）でSDA法での淋菌陽性結果を得た。診断法として、PCR法では偽陽性となる可能性が高く、今回の検討でも24.4%が偽陽性と考えられた。PCR法以外の核酸増幅法で診断する方法は、簡便か

つ高感度・高特異度であり、今後の臨床応用に適していると考えられた。

咽頭に感染した淋菌を消失させる治療法確立を目的として、CTRX1g 単回投与の治療効果について検討した。その結果、CTRX1g 投与は、生殖器淋菌感染症 48 例中 48 例淋菌消失、咽頭淋菌感染患者 25 例中 25 例消失させた。

分担研究者：
川名　尚（帝京大学医学部産婦人科）
本田まりこ（東京慈恵会医科大学皮膚科）
松本哲朗（産業医科大学泌尿器科）
塚本泰司（札幌医科大学泌尿器科）
飯沼雅朗（日本医師会）
岡部信彦（国立感染症研究所感染症情報センター）
大日康史（国立感染症研究所感染症情報センター）
松田静治（性の健康医学財団）

A、研究の目的

改正された「性感染症に関する特定感染症予防指針」では、前文において若年層を中心とした予防対策を重点的に推進していくことが明記されている。また、原因の究明については、定点把握の性感染症の発生動向が的確に反映できるよう、発生動向調査の結果を踏まえた指定届出機関の指定の基準（定点選定法）の見直しに努めることについて述べられている。発生の予防、蔓延の防止については、性感染症の罹患率を減少に導くための施策の設定や、検査や医療を受けやすい環境づくりを進めていくこと、あるいは、性感染症に関する普及啓発のための各種行事の活用、検体の送付などによる検査の試行など、個人情報の保護に留意しつつ様々な検査の機会を活用していくことも重要とされている。また、研究開発の推進については、迅速かつ正確に結果が判明する検査薬の開発、性感染症の無症状病原体保有者の推移に関する研究、地域を限定した、性感染症の全数調査、あるいは、若年者の性感染症を早期に発見し、治療に結び付けるための試行的研究の必要性についても述べられている。

われわれの研究班では、以上の予防指針における重点事項を受けて、以下の４つの項目について研究を行った。

１、性感染症の発生動向に関する疫学研究を行って、定点調査における指定届出医療機関の選定の在り方について検討した。定点調査を検証する方法として、地域を限定した性感染症の全数調査を行い、定点調査の妥当性について評価した。

２、若年者において性感染症を早期に発見し、個人情報の保護に留意しつつ治療に結びつけるシステムの構築を試みた。

３、迅速かつ精度の高い検査法が確立されていない性器ヘルペス、尖圭コンジローマについて新しい診断法について検討した。

４、薬剤耐性淋菌のサーベイランスを継続して行うと共に、無症候のため実態が把握されていない咽頭の淋菌感染に対する適切な診断法・治療法について検討した。

B、研究の概要

◆ 性感染症（STD）発生動向調査から見たわが国の STD の動向に関する研究

【研究の目的】定点把握性感染症として調査が行われている性器クラミジア感染症、

性器ヘルペスウイルス感染症、尖圭コンジローマ、淋菌感染症及び全数調査が行われている梅毒について、2007年の動向について調査し解析した。

【方法】定点把握性感染症については、従来の方法に準じて行われた。

【結果】定点把握の4疾患は、2002年以降の過去7年間でみると、男性では、性器クラミジア感染症と淋菌感染症は2003年以降減少傾向が認められ、性器ヘルペスと尖圭コンジローマはほぼ横ばいで推移した。女性では性器クラミジアは2003年以降、淋菌感染症は2004年以降に減少傾向が認められ、性器ヘルペスと尖圭コンジローマはほぼ横ばいで推移した。

梅毒は、2000年以降2003年までは減少を示したが、2004年からは再び増加傾向が認められ、2007年も増加した。特に、2006年、2007年はそれぞれ前年に比べ、約100例の増加がみられた。

◆モデル県における性感染症の全数調査

【研究の目的】性感染症の発生動向調査（定点調査）における指定届出機関の実情を調査し、選定の在り方について検討する。また、定点調査を検証するために、県単位で地域を限定した性感染症の全数調査を行って、定点調査の妥当性について評価する。

【方法】昨年度は、モデル県として、千葉県、石川県、岐阜県、兵庫県の4県、今年度は岩手、茨城、徳島の3県を増やし計7県において調査を行った。日本医師会、県医師会あるいは地域のSTD研究会、診療科別臨床医会の協力を得て、産婦人科、泌尿器科、皮膚科、性病科を標榜する県内すべての病院・診療所に調査書を送付し、昨年度と同様に2007年11月1日から30日までの1か月間にそれらの医療機関で診断された梅毒、淋菌感染症、性器ヘルペスウイルス感染症、尖圭コンジローマ、性器クラミジア感染症を集計した。

【結果】昨年度は4モデル県での中間集計の結果、総じて60%前後の回収率であった。この結果、人口が多く、定点医療機関が多い地域では、定点での年齢分布は比較的良好であった。また、疾患毎に今回調査と定点調査を比較すると、淋菌感染症では定点での年齢分布は比較的良好であるが、性器クラミジア、ヘルペス、コンジローマでは10代後半の患者数において乖離がみられた。さらに、定点の占める患者数の割合には地域間でばらつきがあることが分かった。（図表）

今年度は、時間的制約から兵庫県、石川県、岐阜県の回収を考慮できなかったが、とくに、同一県内での発生動向の比較や、定点設計の検討を行う必要があると思われた。

◆若年者の性感染症を早期に発見し、早期治療に結びつけるための試行的研究

【研究の目的】若年層を対象として性感染症予防対策について、検査の機会確保と受診しやすい体性整備を意図し、若者向けイベントを活用し、郵送による自己検査を行った。また、若年者向けイベントを通じて、検査コーディネーターを養成し、ピアエデュケーションを試行し、代表的な性感染症の早期発見と適切な治療の促進を目的とした。

【方法】

1）イベント時の自己スクリーニング検査の導入と性行動調査

対象を25歳までとし、クラミジア自己検

査郵送用キット（男性：初尿、女性：腟スメア）と性行動や感染予防、受診等に関するアンケート用紙を関東地区と関西地区のイベント時に配布した。検査は文書での同意を得て行い、検査結果は被験者がインターネットや携帯メールで研究班のホームページにアクセスし、自身のID番号を入力することにより知る方法をとった。検体検査はPCR法により行い、アンケートは検体提出時に同封して回収した。

2）検査コーディネーターの養成について

インターネット上の公募およびメーリングリストでの情報提供により、イベント時の検査勧奨に協力する高校生、大学生、社会人（30歳未満）を募り、面接およびオリエンテーションと研修を行って検査コーディネーターを養成した。

【結果】

1）検査キット配布数は、1850キット（男804女1046）で、検体回収数（回収率）は529名（29%）で、性別では、男性168名（21%）、女性361名（35%）であった。アンケート回収数(回収率)は394名(21%)で、性別では男性121名（15%)、女性268名（26%)、その他5名であった。

性器クラミジア陽性例(陽性率)は、男性11名(6.5%)、女15名(4.2%)であった。

アンケート協力者の年齢について、男性18～19歳13人、20～25歳78人、26歳以上27人、年齢記載なし3人、女性14～19歳29人、20～25歳194人、26歳以上39人、年齢記載なし6人であった。

初交年齢は女性の方がやや早い傾向であったが、中央値は男女とも18歳であった。

性感染症の検査や治療に望むことは、「自宅で検査を受けたい」「気軽に受診できる医療機関を知りたい」、「検査や治療の費用」、「具体的な治療方法」、「具体的な予防方法」を知りたいが多く挙げられた。

性に関して相談したい相手は、男女とも友だち、彼・彼女の順に多く、次に女性は医師や看護師、男性は携帯やインターネットという順であった。

2）検査コーディネーターの養成については、今年度の活動を参考に、今後の検査キット配布についてマニュアル化して普及することとした。検査コーディネーターとして活動した若年者と研究協力者であるCAI（Campus AIDS Interface）が企画して、「検査コーディネーターになるあなたへ 虎の巻」を作成した。全国の自治体、保健所等へ配布し、次年度からの性器クラミジア自己検査の普及について役立てることとする。

◆ 性の健康相談室を通じての性感染症の蔓延防止に関する研究

【研究の目的】本研究では、1、性活動が活発な若年者の生活に必要不可欠な情報伝達ツールとなったEメールによる「性の健康メール相談を通して、また、2、「性の健康相談室での個別相談、検診を通して、STD/HIV感染の早期発見・予防啓発に努め、若年層における性感染症の蔓延防止に貢献することを目的とした。

【方法】1、インターネット・ホームページおよび携帯電話用ホームページのサイト上の専用フォームより相談メールを募集し、相談にあたった。

2、性の健康相談室での個別相談、検診は無料、匿名、電話による完全予約制をとって行った。

【結果】性の健康メール相談に、今年度の

11ヶ月間に1168件の相談が寄せられた。そのうちの80%が携帯メールであった。若年層に有効な性感染症の予防啓発策を見出すために、相談メールの内容を分析した。

◆性器ヘルペス、尖圭コンジローマに関する新しい検査法の開発と評価

【研究の目的】性器ヘルペス、尖圭コンジローマに関しては迅速かつ精度が高い診断法が確立されていないが、性器ヘルペスでは、最近開発された遺伝子診断法であるLAMP法の臨床応用に関して検討し、尖圭コンジローマの診断では、イムノクロマトグラフィー法による迅速検出法について検討した。

【方法】HSVを分離して診断した女性性器ヘルペス患者42名を対象とした。検体は病変のある時は病変から、ない時は外陰や子宮頸管から細い綿棒で擦過し、ウイルス分離のために抗生物質と仔牛血清5%の入った培養液とLAMP法のための蒸留水の2種類のトランスポートメディウムにてそれぞれすすいで検体とした。

尖圭コンジローマでは、HPV感染症の患者の皮疹部より、擦過および生検にて試料を採取し、抗原検査用、核酸検出法用、イムノクロマト法用の3つに分けて検討した。

【結果】女性性器ヘルペス患者から得た352検体では感度88.2%(105/119)、特異度99.1%(231/233)と良好な結果を得た。HSVの型の決定はモノクローナル抗体による型と100%一致した。偽陰性になった臨床検体についてみるとウイルス量が少ないことが考えられた。

イムノクロマト法による尖圭コンジローマの診断では、HPVに対する各社のモノクローナル抗体やポリクローナル抗体を用いて検索を行った。種々な組み合わせで検討を行ったが、すべて陰性であった。これは組織中のHPV量が少ないためと思われた。

◆薬剤耐性淋菌のサーベイランスと淋菌感染症に対する適切な治療法の研究

【研究の目的】淋菌感染症蔓延の原因である薬剤耐性菌の蔓延状況について調査し、まだ診断法が確立されていない無症候の淋菌性咽頭炎の診断法と淋菌性咽頭感染に対する適切な治療法の開発を目指した。

【方法】

1、首都圏において2007年に分離された淋菌に対する各種抗菌薬の感受性を測定し、過去に得られた成績と比較して感受性の推移について検討した。

2、薬剤耐性淋菌に対し、経口の抗菌薬であるclarithromycin(CAM)とcefteram(CFTM)の併用効果がin vitroで認められたため、淋菌感染症に対し、CAMとCFTMの併用投与を行い臨床効果について検討した。

3、生殖器淋菌陽性患者における咽頭の淋菌の陽性率について検討するとともに、咽頭の淋菌感染の新しい診断法として、うがい液を検体として、培養法、PCR法、SDA法について検討を行った。さらに咽頭の淋菌陽性患者に対する抗菌薬の治療効果について検討した。

【結果】第一選択薬であり注射剤であるceftriaxone(CTRX)、cefodizime(CDZM)、spectinomycin(SPCM)に対する感受性率は2006年までと同様、2007年も変化は認めず100%であった。一方MIC累積分布では2006年まで徐々に耐性化が続いていたが、2007年では逆にMICの低下が認められ、わずかではあるが感受性への移動が認

められた。また内服薬であるcefixime（CFIX）、CFTM、levofloxacin（LVFX）に対しても感受性率の上昇を認め、MIC累積分布でも2006年まで徐々に続いていた耐性化傾向から、2007年ではわずかではあるが感受性への移動が認められた。

うがい液を用いた咽頭の淋菌感染の診断では、41例の淋菌性尿道炎患者から13例（31.7%）でSDA法での淋菌陽性結果を得た。診断法として、咽頭淋菌の検出においては、PCR法は偽陽性となる確立が高く、今回の検討でも24.4%が偽陽性と考えられた。

咽頭の淋菌に対するCTRXの治療効果について検討した結果、CTRX1gの単回投与は、生殖器淋菌感染症患者48例中48例消失、咽頭淋菌感染患者25例中25例消失させた。この結果、咽頭に感染している淋菌はCTRX単回1g投与で除菌可能と思われた。また、淋菌性尿道炎に対するCAMとCFTMの併用療法は臨床的にも有用であることが示唆された。

C、考察とまとめ

わが国の性感染症動向調査（定点調査）では、性器クラミジア感染症、淋菌感染症は、2002年をピークにして減少傾向がみられているが、今年度も同様の傾向が続いていた。一方、性器ヘルペスと尖圭コンジローマは男女とも横ばい状態がみられている。問題となるのは梅毒で、2004年から増加傾向が認められ、2007年も増加がみられた。とくに2006年、2007年はそれぞれ前年に比べ、約100例の増加がみられ、今後その動向には十分注意をする必要がある。

現在行われている定点調査そのものについては、以前より批判も多く、各地域による定点設定方法のばらつきや、必ずしもSTD患者の受診数が多い施設が定点に入っていない、泌尿器科、産婦人科などの定点設定のバランスが悪いなど多くの問題点が指摘されている。現行の定点調査の見直しについては、改正された、「性感染症に関する特定感染症予防指針」においても明記されている。このような状況を踏まえて、本研究班では、性感染症発生動向調査の妥当性について検証することを目的として、地域を限定した性感染症の全数調査を設計し、性感染症の発生動向の分析と指定届出機関の現状について調査することを試みた。作年度は、千葉、石川、岐阜、兵庫の4県、今年度は岩手、茨城、徳島の3県を加え、計7県をモデル県として、日本医師会、各県の医師会また、産婦人科、泌尿器科、皮膚科などの臨床医会の協力を得てそれぞれ、11月1日から30日までの1か月間で性感染症の全数調査を行った。昨年の総回収率は、各県とも60%前後であった。この結果、人口が多く、定点医療機関が多い地域では、定点での年齢分布は比較的良好であった。また、疾患毎に今回調査と定点調査を比較すると、淋菌感染症では、定点での年齢分布は比較的良好であるが、性器クラミジア、性器ヘルペス、尖圭コンジローマでは10代後半の患者数において乖離がみられた。このことは、10代後半の若年の性感染症患者は、定点に指定されている医療機関には受診していないことを示唆する結果であり、近年の性器クラミジア感染症における患者数の減少が、必ずしも実態をとらえていない可能性があることを示すものであろう。さらに、定点の占める患者数の割合には地域間でばらつきが見られたことから、定点

のあり方について今後見直しを行うと同時に、定点の設定法に関する一定の基準を定めることも必要ではないかと考えられた。

若年者の性感染症を早期に発見し、早期治療に結びつけるための研究としては、今年度も、首都圏で行われたイベントや学園祭などの行事を活用して、クラミジアの自己検査を郵送法により行った。今年度は1850例の検査キットを配布し、総回収率は29%で、無症候の若年者における陽性率は男性6.5%、女性4.2%で、昨年よりは低かった。受診行動については、医療従事者には性についての相談を希望し、検査や治療の方法や治療費、具体的な予防方法を知りたがっていた。検査コーディネーター活動は自らの知識や関心を向上させ、若年者同士が性感染症予防について話し合う機会になったが、この検査コーディネーター活動を普及させるため、養成マニュアルとして「虎の巻」を作成した。若年者を医療につなげるためには、検査から受診まで医療機関との円滑な連携を図る必要があると思われた。

今後も各種行事を活用することにより、若者が性感染症のスクリーニングが受けられる機会を増やし、性感染症の検査や治療あるいは予防に関する正しい情報をメディアやインターネットなどを通して定期的に発信することが必要であり、当事者である若者の視点を取り入れた啓発活動を強化していく必要がある。また、性感染症予防の総合的な対策は、各省庁や地元医師会、関係学会、学校教育関係者などが協力し合って講じることも重要であろう。

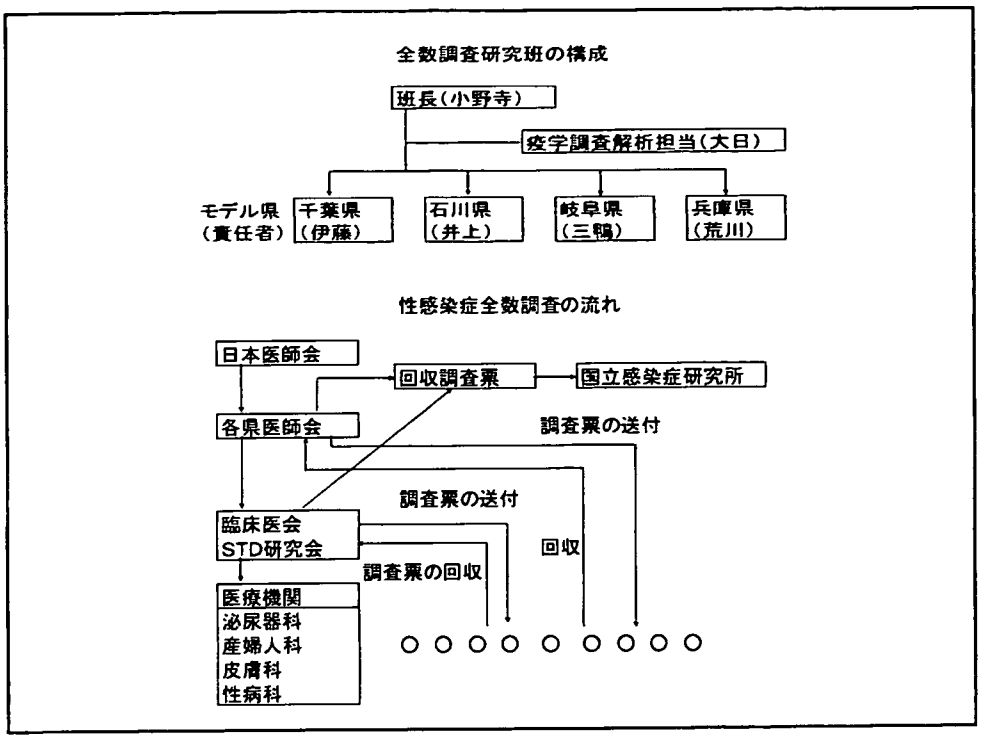
薬剤耐性淋菌の動向をみると、現時点で性感染症学会の「診断・治療ガイドライン2006」で推奨されている淋菌感染症の治療薬である、SPCM、CDZM、CTRXにおいて、感受性率は100%が保たれていた。
また、昨年に比べ、薬剤全体において、淋菌に対する感受性がやや回復している傾向が認められた。

無症候の咽頭の淋菌感染の診断において、塗抹培養法は検体の採取が手技的に困難なことから、陽性率にバラツキがみられていたが、今回検討されたうがい液を用いるSDA法による診断は精度も高く、今後咽頭の淋菌感染診断の中心になる可能性が示された。さらに、淋菌の咽頭感染に対してはこれまで適切な除菌方法が確立されていなかったが、昨年度に引き続いて行った調査で、CTRX 1gの単回投与が有効であることが再確認され、淋菌感染症の第一選択薬としては、現時点では単回投与で性器、咽頭とも除菌可能なCTRXを中心に選ぶべきと思われた。

性器ヘルペスに関する迅速かつ簡便な方法としてのLAMP法の診断精度、特異度が優れていることが明らかになり、その臨床応用が期待される成績が得られた。今後は対外診断薬としてのキットの確立が必要であり、保健収載の可能性についても検討する必要がある。

D 発表

研究者ごとに記載



回収率
千葉県

1)千葉県泌尿器科医会
(平成19年1月9日現在)

回収48施設／105施設中(回収率45．7%)
患者数:416人(男性394人、女性22人)
最年少16歳、最年長73歳
①梅毒:5人
②淋菌感染症:72人
③咽頭淋菌感染症:0人
④非淋菌性尿道炎:171人
⑤性器ヘルペスウイルス感染症:24人
⑥性器ヘルペスウイルス感染症(再発):20人
⑦尖圭コンジローマ:30人
⑧性器クラミジア感染症:103人
⑨性器クラミジア感染症(妊婦検診):6人
⑩咽頭クラミジア感染症:0人

2)産婦人科
12月末日で回収率約60%(280施設中)

3)皮膚科
年末で回収71通/287通

石川県

回収率

産婦人科　60/78(76.9%)

皮膚科　60/87(69.0%)

泌尿器科　26/49(53.1%)

性病科　1/1

兵庫県

回収率

562/860(65.3%)

岐阜県

泌尿器科・産婦人科・皮膚科　151/292(51.7%)

その他の診療科　376/1117(33.7%)

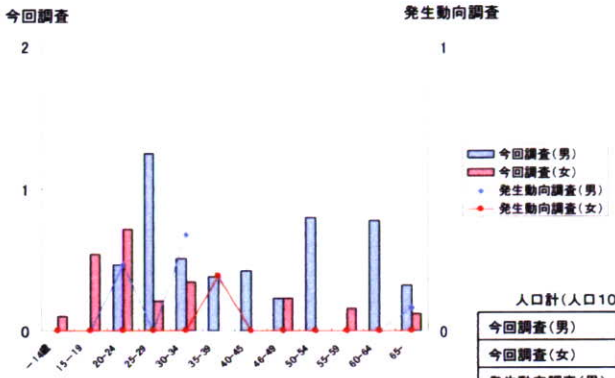
全体　527/1409(37.4%)

性感染症全数調査の解析結果

- 各県別・4県合計
- 梅毒、定点把握4疾患、その他疾患
- 年齢分布を発生動向調査と比較
- その統計的検定
- 医療機関毎の報告数分布（定点と非定点の比較

- 年齢分布を発生動向調査と比較

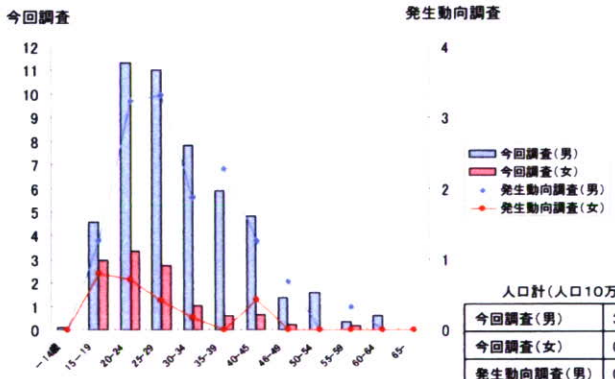
梅毒（4県合計）（人口10万人あたり）



人口計（人口10万対）

今回調査（男）	0.385178
今回調査（女）	0.170748
発生動向調査（男）	0.068782
発生動向調査（女）	0.013134

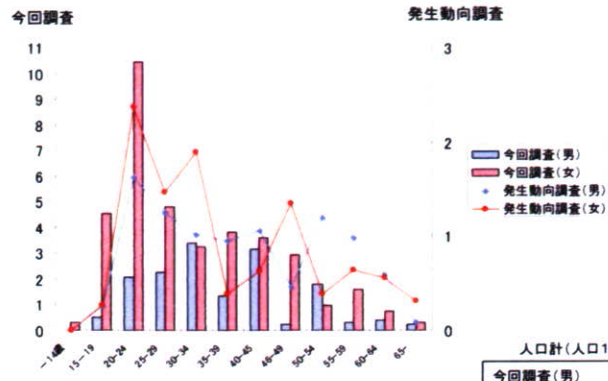
淋菌感染症（4県合計）（人口10万人あたり）



人口計（人口10万対）

今回調査（男）	3.301526
今回調査（女）	0.682991
発生動向調査（男）	0.949189
発生動向調査（女）	0.144479

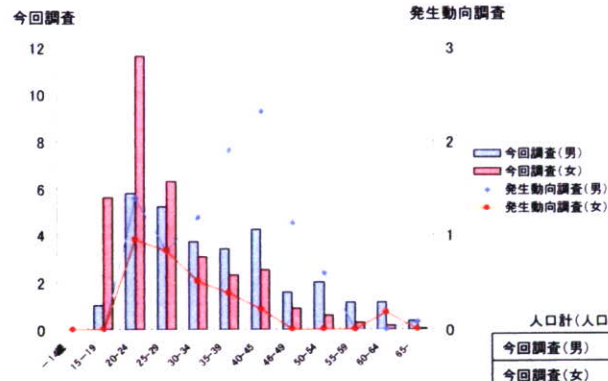
性器ヘルペスウイルス感染症（初発あるいは初感染）（4県合計）（人口10万人あたり）



人口計（人口10万対）

今回調査（男）	1.114265
今回調査（女）	2.364199
発生動向調査（男）	0.660305
発生動向調査（女）	0.70926

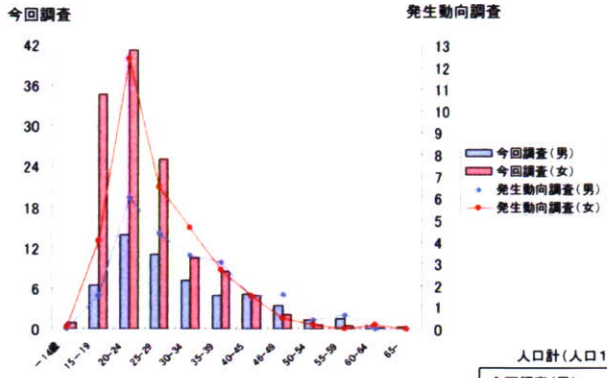
尖圭コンジローマ（4県合計）（人口10万人あたり）



人口計（人口10万対）

今回調査（男）	2.049698
今回調査（女）	2.009569
発生動向調査（男）	0.646549
発生動向調査（女）	0.197017

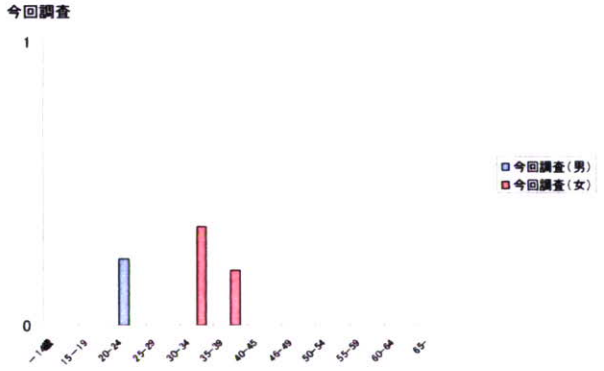
性器クラミジア感染症（発症者）（4県合計）（人口10万人あたり）



人口計（人口10万対）

今回調査（男）	3.672948
今回調査（女）	7.591705
発生動向調査（男）	1.499443
発生動向調査（女）	1.9833

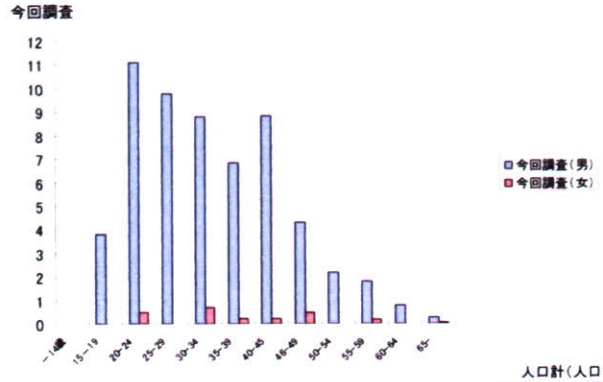
咽頭淋菌感染症（4県合計）（人口10万人あたり）



人口計（人口10万対）

今回調査（男）	0.013756
今回調査（女）	0.039403

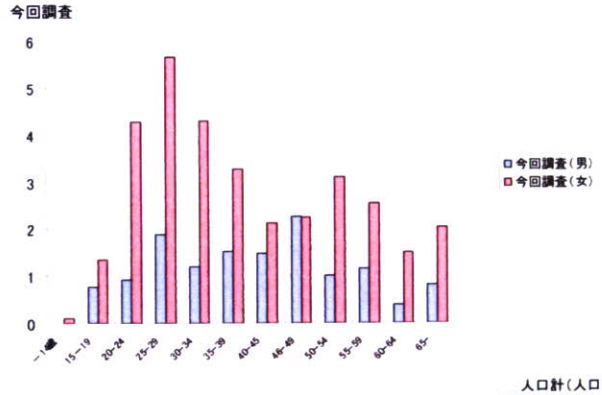
非淋菌性尿道炎（4県合計）（人口10万人あたり）



人口計（人口10万対）

今回調査（男）	3.975588
今回調査（女）	0.157613

性器ヘルペス感染症（再発）（4県合計）（人口10万人あたり）



人口計（人口10万対）

今回調査（男）	0.990458
今回調査（女）	2.443005